

長年、水稲や大豆を手掛けていた小玉廣治さん。娘の富士子さんが主立ってネギの生産を始め、今年で3年目になる。栽培年数が浅いながらも、昨年における10アール当たりの反収が3・4トンと、管内でもトップクラスの高収量を記録している。細やかな栽培管理に汗を流す小玉さん一家に、安定生産への姿勢を伺った。

ネギ栽培で夏期の収入を確保

「夏場の収入を確保するために、野菜にも取り組もうと考えました」と富士子さんは話す。米や大豆の場合は秋以降の収入になることに加え、米価が不安定な状況が続くことも後押しし、転作作物としてネギの栽培を始めた。

約60アールの全てが「夏扇パワー」。3回に分けて定植作業を行い、今年は1回目の定植を4月3日に終えた。出荷は7月15日頃から予定しており、12月まで続く見込みだ。

昨年まで手掘りで収穫していたため、出荷期は特に作業に追われていたという。今年からは、全自動収穫機を導入。「収穫が楽になり、出荷までの作業がスムーズになると思います」と期待している。

10月から4月にかけては、ネギの育苗を

ハウスで行う。温度管理に細心の注意を払ううえ、降雪量が多かった昨冬はハウスの倒壊を防ぐために、ハウス内に支柱として木を立てて補強した。

よく観察してきれいな圃場を維持

ネギの栽培において、排水対策はとても重要だ。小玉さんの圃場は、以前は水田だったためか「去年は大雨の後などに、なかなか水がはけなかった場所があり苦労しました」と振り返る。そのため、暗渠に加えて圃場内に土を入れて高さをならすなどの対策を施してから、今年産の栽培に取り掛かった。

定植後は、雑草対策と土寄せ作業に汗を流す。「常に草とのたたかいだ」と話す小玉家の圃場では、とりわけ除草作業に念を入れており、圃場がきれいな状態を維持し続けている。もちろん病害虫防除も欠かさない。「様々な虫がいるため、圃場やネギをよく観察して、早め早めの防除作業を心掛けています」という。

ていねいな栽培管理から おいしいネギができる

「我が家のネギを食べたら、とても甘く

ネギの栽培を始めて2年目の昨年に、高いレベルの反収や品質の安定生産を実現した小玉さんは、この度の総代会における表彰者に選出されました。雑草や排水への対策、防除などの基本的かつ重要な作業を計画的に行い、日々の圃場管理に妥協しない姿が、模範的な生産者です。



男鹿地区営農センター
長谷川 弘幸 センター長補佐



感じました。特別に「おいしい」と、廣治さんをはじめ、一同が笑顔を見せた。「生産者の自分たちが食べても甘いと感じるくらい、手を抜かず丹精込めて作っています」と富士子さん。今後、ネギの栽培面積を80アールに拡大することを目指しながら、今年もていねいな圃場管理に励んでいる。